027
426
1

芭蕉翻雪

夢下論

全

蓬雲出

027
426
1

愛知女専
第11857号
圖書

四六三

蘭

蹟印論序

夫蹟印の始まりは唐の太宗皇帝の時代に
元の下に受継がれ一真室宗匠より
正統の祖となりしころの芭蕉翁も点茶
用ひ及其角雪の高弟なるもそれら
点茶を用ひる作業とせしかば蹟印
のつていやみきく角よりまあさ
角一さんと近世俳諧の一枝なるもの
一座一興のものとなれり判者は点茶を

用しさせる句あれば点をもて当甲乙を
競ひ勝負を争ふる法なれども
其業に巧なるに於ては
中比まで盛流とよりこのかた長歌何百
何千首を倍して句千高判を
なる法面目とし作者の業附句連歌
を論ずる一句千判を加ふるを流て
風曲奇怪の句を立み俳諧放言を更し
或は卑句を以て席千満をあるべ他の句

を盗むをもてひたすらに勝んを欲
紙千枚を雅会を設ひ賞を
乞ひ戯をはじめ
俳諧の風俗都鄙を慕ふ及て
市を開くるものしるべ昔の如く一点二点
倍して十卯廿卯を限とせる法当流とし
畧て業古千所をもて判し
一巻の佳批を定るも附句八句一巻の
巧拙を考へ二句の附肌三句の弱を心

[illegible]釈迦[illegible]白等の時[illegible]宜しきを賞して点
[illegible]を加へ[illegible]又[illegible]点を用ひ
[illegible]は一句の品を定め或は番(つがひ)のものを
の勝者を分つのあれも和歌者流の[illegible]
[illegible]此[illegible]判句を異[illegible]点の
甲乙[illegible]席上の
[illegible]刺討論[illegible]は寂蓮俊頼の指南
首あるは國基良暹のまたまの難陳なと
[illegible]の例もあれも尊卑老[illegible]

互に問答して[illegible]を勝む[illegible]
附合の[illegible]点を詞[illegible]
作者も刺者[illegible]
[illegible]
連歌の[illegible]点を加へ[illegible]
其巻中の[illegible]
高判を[illegible]作者の[illegible]
[illegible]又[illegible]高判を
加へ[illegible]刺者の廣恕も

極まりはまより作者の巧拙判者の
識不識によりて一座一巻の上の甲乙
を知るべきましてこゝに著はれしものを
芭蕉其角嵐雪なとし先達堪能の人にて
の門墨引点印の論解しこれを叙して
俳諧に點印を用ゐる事を始めし

弘化丙午秋

秋半亭九董述

応變論

墨引点印の事ハ中古洛の貞室よりして
はじまりみだりに其印を用ゐるものあまた
秘して用ひける者を今につたへし
うけしよりて幻住庵の系譜にて正秀
尚白等これにあまた應し殊に連衆
の門墨引を止し俳諧は十五点の高下
をあらはし近来ハ桃青にならひしさきに
ありとおもふ色々なれ

一点　　二点

砌心の字五字七字ともあらく
座の句題にてこれ人時の此器に
を用ひ少し志厚くやはら侍て
珍重ぬと称しんか

二点　　一点

二点ハあ月子許し　珍重あれと三点
乃句句ともに　全篇の趣ともに
ひとしくるよし

○啼鵠

二字印ハ都名句意の楚の引墨と弁へ
むと色紙しさゆの用とよき附合其人
其場の中の句ゆえ出ぬへし用もれく能
を能しあらりぬ丙己欠

○岳楚月

三字印ハ六印の為し時分時節ゆつく
いひのくく稱美のゆえ用ひた侍
観相の両用にて押もあ侍

○美蓉樓雪

四字ハ八印也天相就れ仲多の手柄を楚の秀逸とも見定めこゝを其時ハ本くゝ

○長安夕鐘華

五字印ゝ全篇玉の玉ゝる句を拳るゝも盡す

○舟登成帆士成風能芭蕉哉

芭蕉の舟ハ貞享のひゝ東武の深川ゝ

ゝ予ゝ庵室ゝ号ゝ芭蕉ゝ葉ゝ今ゝ廢ゝ

ゝ十五印の模様ゝ

都ゝハ三点も楚ゝ心ゝ見ゝ分ゝ句ゝ

判者作異ゝ手ゝ柄ゝ

附合ゝ歌ゝ

立ゝ

執筆

附言

右の應變論といふものを畧せるは
はなはだ人のまるところなり既に
往年賀の見風のかたみのうちといふ
集中にもこれを載せ蕉翁傳来のものとひとも
きふかはるべき人も多のるべ
ども甚文法全篇ゆるくをかく
門人の附會せるものなるもたのう

るべし是にてはるかに蕉翁主伝と
いひつたへし書籍少なからざるこの
ときにあまた甚去偽を分ちがたきも
のの多し翁を敬ふを大切と
おもふゆゑ麁忽にて誤を伝ふるべ
き事蕉翁の古主伊賀の藤堂探丸子の家にて芭蕉翁の
引墨を加へらるべし俳諧の一変を
これをまことに翁の奥にてもるに正

さりの也ちのるに甚おもむき右の
應変論と違へるところもあれども
ものの真論をもるものこれをよく後
ゝ著し給る拙両用おろそかなる学の
ふ所ゝ任ぜる也

芭蕉翁引墨與印之寫

朱

二十名点

内 名七

〇 ハ

芭蕉庵藏書

歌仙の解辨

花影上欄干　新月色　廻雪

日く思判を加へる巻そこに五字の句向上の句と云字を奇ユヤ標一二字を接続の句と云ふ今十余の門人一筋に手の方寸を密授され侍りし事ハ一句の理をこんせてつゝふ句をせん

もとより一ちうとてひつぢも一面白一ちうとてなくもなけれとも人をとの句つゝふる句ふ見安を宗匠作者の勵とあるべしと巻をとて就をとて後迄句ハ張良の胸中の兵乃ち日夜みゆる出るその変をつゝの秘訣又人と思ひ侍りしあり論迄まあるまを其一句乃死活を考合てこんとるべ也一形式ものも用捨の字を考う

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

戲賦一絶呈几右

愛君滑稽一時豪雁字帶霞入二

彩毫想見梅花門裏月不知誰與定推敲

心水道人稿

應和白

[illegible]

甚角

[illegible]

[illegible]

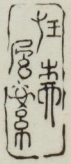
[illegible]

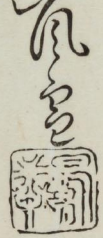
[illegible]月色[illegible]屑[illegible]を楚
乃[illegible]立[illegible]
滿八七言四句海[illegible]廿八字
[illegible]一[illegible]
四点八点と云ハその制作乃用[illegible]
と同[illegible]八圍一乃文[illegible]
詩乃章面白[illegible]点を信階[illegible]
批の章千変の法を信階[illegible]
[illegible]滿り[illegible]美[illegible]詩の八点

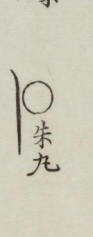
[illegible]心を[illegible]
[illegible]四点八[illegible]
[illegible]千長老[illegible]
用元[illegible]
家[illegible]の点形物[illegible]
[illegible]
の字新月色[illegible]字用雪の二字[illegible]改め
[illegible]雪月花の[illegible]
[illegible]

翔[illegible]の[illegible]ものの
[illegible]の[illegible]を[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]

晉子







卯式

百花嬌語　翠蓋

墜玉簪　探荷

弄晩凉　探菖

取句法

一 其角之豪壯。嵐雪之高華。去来之真卒。素堂之洒落各可法。麥林支考雖句格幾陋各爲一家。亦有可取者。

一 包括諸家者蕉翁也。而其角嵐雪伯仲。蕉翁者居半。麥林支考之徒十一丙己。

一 世有稱蕉門者特不知蕉翁之風韻其所吐句倘呼論不脫支麥之俗習稱之伊勢流或美濃流可也。豈得曰蕉門乎。

人號曰田舍蕉門知言哉

一 意匠体也。而於則用也。雖而於則調芭意匠畀俗者不足取。譬若使蹇人穿金甲。特花戟人見則曰盛哉而敵兵咫尺白刃臨頭。居然俟死者。徒是塡溝之具耳。然則意匠善而於則不調可乎。而於則不調則理不通。還是喻有啞人懷胸天地經緯之才欲說秦楚圖縱横而不能說撫心指口吶々然止者亦無所用。

一 知俳諧之大道無他嘯月賞花使遊心於塵寰外常友蕉翁其嵐之流亜專以脫俗氣爲最

一 選句之法席上各曰其志專討論不可憚他門或面謾或屏息而退誹他者不容再出席

右ハ古教半夜會席乃至書かゝを今爰ニ謄録ス〳〵跋ス

京極第五橋頭

汲古堂梓行